

〈論文〉

コミュニケーション活動における 日本社会呼称のメカニズム

—— 日米の比較 ——

赤坂和雄

1. 序

日本は名 (first name) のない社会だと言われることがある。通常の生活では、多くの場合、姓 (last name) で呼び合っているからだろう。

日本では、企業の世界では勿論のこと、学校その他の社会などにおいても、相手呼び合うのに姓が使用されている。ましてや、結婚した娘婿も姓やタイトルで呼んでいることが観察されている。

更に面白いことには、企業の世界などでは姓すら使用されない場合が多い。相手をタイトルで呼び合っているからである。部下は上司の社長や部長、課長を「名前+さん……」とは呼べず、「社長、部長、課長」などと呼ばなければならない暗黙のルールが日本社会には存在している。しかも学校などでも同じようなことが行なわれている。幼稚園では先生は幼児たちを「～ちゃん」と名で呼び、小学校では教師は男生徒を～くん、女生徒を～さん、と姓で呼ぶのが普通のようなものである。中高などでも小学校と同じような呼び方をしている。しかし、中高などでは生徒を呼び捨てしている教師も多いと言われている。

また家族、親戚の中での呼称にも面白い観察がある。特に不思議に思われるのは、夫婦の間での互いの呼び方である。両者は互いに名で呼び合っていないのが普通のようなのである。あたかも両者には名前がないかのように思われそうである。教え子であった妻が、結婚しても夫を「先生」と呼んでいるという話もよく聞く話である。

歴史上に現われる人物の名は例外のようなのである。実際は織田信長、豊臣秀吉と姓名で表記はされるが、ノブナガとかヒデヨシなどのように姓では

なく名で呼ばれるのが多いようである。このようなことを除けば総体的に日本は姓の社会と言ってもいいのではないだろうか。

このような観察が行なわれてくると、日本社会では名前がどこかへ行っ
てしまい、姓だけが存在しているようにさえ思われても仕方がないのかも
知れない。

これがアメリカ人との対話になると話は変わる。日本人はアメリカ人に
名で呼ばれることにはさほど抵抗を感じないようである。そして日本人の
方も何の躊躇もなく、平気で彼らを彼らのファーストネームで呼んでいる。
アメリカで飛行機に乗ってみると良くわかる。飛行乗務員の胸にある名札
には姓ではなく Mary とか Jill などのように名で記されている。特別の例
を除けば、アメリカはファーストネームの世界である。あたかも彼らには
ラストネームがないかのようにも思えることがある。

電話帳や名簿などで番号や住所などを調べようとした時、名でしか覚え
ていない場合が多く、大変なことでもあるようだ。

以上のような観察から、日本社会はラストネームを重んじ、アメリカ社
会ではファーストネームに重きをおくというような仮説をたてることがで
きる。そして日本社会はアメリカのそれに比べると、やや複雑なメカニズ
ムを持っているとも言える。

この小論では上記に述べた日米両国における呼称のメカニズムを論じて
みたい。

2. 姓が支配する日本社会

日本社会における相手の一般的な呼び方について、次のように細かく考
察してみる。

2.1 保育園、幼稚園社会

保母や幼稚園教師は園児に対し～ちゃんと名で呼ぶのが普通のように
ある。

2.2 小学校社会

一般的に教師は男生徒を～くん、女生徒に対し～さんと姓と呼んでい

る。

2.3 中学，高校社会

上記の小学校社会と同じように呼ぶのが一般的。しかし，中高校では多くの場合，教師が生徒をくん（君）もさんもない呼び捨てをしているとの報告もある。

2.4 家族社会

2.4.1 親が子と呼ぶ場合

家族では親が子を名で呼ぶのが一般的だが，中には敬称を表す～さん，～ちゃん，～くんがつけ加えられる場合もある。面白いことに，～ちゃんの場合はタツアキちゃんとかヨシコちゃんなどのようではなく，タツちゃんとかヨツちゃんのようにニックネーム化することが多い。またほんの8カ月程ではあったが我が家にホームステイしたロビンは，年齢的にも若いというせいもあったのではあろうが，家族の者からはロビンちゃんと呼ばれていた。

2.4.2 子が親と呼ぶ場合

子が親と呼ぶ場合は，おとうさん，おかあさんなどが一般的だが，とおさん，かあさんの呼び方も多く観察される。その他パパ，ママなども多用されているようだ。

2.4.3 その他の場合

その他の場合として，名を使用せず，おにいちゃん，おねえちゃんなどのような呼び方も存在している。不思議なことに弟や妹にはこのような呼び方はない。

2.4.4 年齢による上下の区別

日本社会では上下の区別をはっきりさせる習慣がある。兄弟姉妹がはっきりと使用されている。他人に紹介する時は，兄，弟，姉，妹をはっきり区別する。

他方アメリカ社会では日本でのような上下を表わす呼び方をしないのが普通である。This is my brother, Johnとか This is my sister, Kathyなどのように上下の関係がはっきりしない表現のし方が習慣

のようである。

2.4.5 夫妻間の呼び方

何気なく日本語生活をしていると、友人のアメリカ人が同僚の教授夫人に向かって「ヒロコ」と呼んでいるのを耳にし、何となく妙な違和間があったのを覚えている。同僚の我々でも同僚夫人に対し、名で呼ぶことには抵抗がある。いや、むしろそんなことは絶対と断言していいほど許されない社会でもあるのだ。

夫が妻を何と呼ぶか、また妻が夫を何と呼んでいるのかの調査は未だ終了していないが、その結果は容易に想像できる。これは今後の課題でもある。

2.4.6 息子の妻

息子の妻を他人に紹介する時、どう呼べば良いのかは多くの日本人にとって苦慮するところである。朝日新聞「ひととき」への相談⁽¹⁾からで色々な呼び方を展開させているのは大変興味深いことである。

息子の嫁を「平等な響きのある『連れ合い』、シンプルに『息子の妻』、「親近感を持てる『むすめ』など色々考えられる提案があった。姑(しゅうとめ)からずっと「嫁」と呼ばれてきたが、この呼称には「家族制度が重くのしかかった、女性軽視から逃れられないものを常々感じていた」や、「連れ合い」や「(息子の)お相手」が穏やかで納得のいく呼称」などが上げられていた。

また「義母を『はは』と表現するように、義娘で『むすめ』が良いのではないかなどは面白い発想だ。或いは「新しい娘の〇〇です」、「昨年から娘の〇〇」などユーモアなタッチもあり、実際彼女たちをどう呼ぶかは大変複雑である。

このようなことが新聞紙上に取り上げられ、色々な呼称が論じられるというのは日本社会の色々な場面での呼称の難しさを如実に物語っているとも言える。

2.5 親族同志、近所の人たちとの場合

親族同志の場合は、年齢による心的支配がある。通常、～ちゃん、さ

んではあるが、時には、姓+さんの場合もある。しかし親族同志ではあっても親近感での作用があるように思われる。近くにある親族、遠くにある親族で相手の呼び方が変わってくる。その心理的状況で姓で呼び合うことが余儀なくされていると考えられる。

近所の人たちとの関係においても、比較的親しい間柄の場合には上記の親族同志の関係と似た場合がある。しかし、余り親しくない場合は全くの他人に接する時と同じ対応になるようだ。

2.6 クラスメイト間の場合

クラスメイト間同志の呼び方は年代、学年による相違が大きい。保育園、幼稚園、小学校初期時代などは、名で呼びあっているようだが、小学校高学年以上になってくると、姓に変わってくる。しかも、姓には～くん、さんを付けない場合がおおいようだ。驚くことに、最近では女の子たちの間でも同じことが観察される。

2.7 友人間の場合

中高以上の間柄では、かなり大人社会の呼び方に変わってくる。自己の確立、社会とのつながり、先輩、後輩の間柄と、対人関係が複雑になってくるからである。大学に入ってからと呼応関係もこの範中に入る。特に日本社会では、先輩後輩の間での呼称に特徴が見られる。先輩は後輩をめったに～さん、～くんとは呼ばず姓だけの呼び捨てになっている。しかし一方後輩が先輩を呼ぶ場合は必ず男であれ女であれ彼らを～さんで姓で呼ばなければならない心理的状況が存在している。

2.8 企業の中での場合

企業社会に入ると、対人呼応関係は一段と厳しいものになる。余程親しい社員同志、特に女性間の場合を除き、名で呼び合う関係は完全になくなる。

時には、上司に対しては姓すら使用出来ない関係に変わることがある。上司は部下の姓で呼ぶのが普通であるが、部下が上司に対して呼ぶ場合は、その大部分は上司の肩書で呼ばなければならない暗黙のルールが存在している。これらのルールをおかし、上司を、姓+さんと呼んだりす

ると、間違いなくその関係にはギクシャクした何かが生じるのが普通のようにである。

また企業間での場合にも面白い観察がある。相手の企業を企業+さんと言うように、相手の社名に、「さん」をつけているのである。例えば、ソニーさんとか、NTTさんなどのようになる。商売をしている関係においては、どうしてもそうしなければならない、精神的なプレッシャーとでもいうべきものが、存在しているのであろう。

2.9 教員間の場合

一般論的に言えば教員間の場合も例外ではない。教員同志は互いに～先生とか、「先生」と、姓なしで呼び合う社会である。勿論、～さんのような場合もあるが、これは企業社会での場合と同じように、互いに親しい間柄か、管理職の教師あるいは年上の教師が使えるくらいのものであろう。このようにここにも言語的制約とでも言われる心理的プレッシャーが存在しているように思われる。

3. 日本社会における姓 vs タイトル

以上の観察から、ここでは日本における姓と肩書について考えてみよう。

上の考察からも理解できるように、日本人社会では姓と肩書だけが先行しているようにもうかがえる。会社の社長はどこへ行っても、社長、社長と呼ばれ、学校の教師も同じように先生、先生と呼ばれる。名前にさんをつけて呼んでも良さそうではあるが、どうしてもそうさせない、暗黙のルールが、どこかに潜んでいるかのように、社会のメカニズムが動いている。このような感覚は、日本人でなければ理解出来ない部分があるようにも思える。目に見えないプレッシャーとでも言うようなものが、根強く日本社会には横たわっているようにも思える。

しかし、これをネガティブだけで考えないでみたらどうであろうか。相手の肩書だけは忘れずにいたら、名前を忘れていても事をはこぶのに失敗は少ないはずである。日本社会に長く滞在している外国人には、タイトル社会が長所でもあると思っている人が多いに違いないからである。

ここで問題になるのは、タイトルのある人たちにも、姓+さんで呼んでしまうことである。このような習慣のない外国人にとっては注意の必要とするところである。姓を忘れても、タイトルで呼ぶのが無難であるからである。

もうひとつこんな事例がある。部長や課長で退官退職した人たちと偶然にもどこかで会った時である。その人たちをどう呼ぶかで困難を感じている人たちが意外に多いことである。職を退けばタダの人とはなるのであるが、これも複雑な一面をのぞかせている。

こう考えてくると、日本社会においては姓よりもタイトルの方に重みがあることが理解できる。

4. アメリカ人との対話

4.1 日本人の習性

アメリカ人と話していると事情が変わる。どちらかというところ、日本人は色々な面で相手に合わすという習性があるようだ。相手は自分の姓ではなく名の方を使ってくると、自分もいつの間にか、それを受け入れ、その外国人とは当然のように名前と呼ばれても抵抗を感じなくなってしまう。しかし、その中に他の日本人が入ってくると、日本人同志では依然として姓で呼びあう。他から見てみると妙な感じにもなる。姓+さんと呼ばれた日本人と、名だけで呼ばれた日本人では、違った人のようにも思えてしまうことがあるからだ。二つの自分が存在することにもなる。

この場面がアメリカでのこととなると話は変わる。姓よりも名が使われる社会にあれば当然のことである。その国の習慣に従わなければならないと思うのが普通である。前述のごとく、日本人は相手に合わすことにはそれほど抵抗がないから、名で呼びあうことにもすぐ慣れていくのであろう。

しかし、もう一度、日本でのアメリカ人との対応を思いだしてみたい。どれだけの外国人が日本人を姓で呼んでいるだろう。また、どれだけの日本人が外国人を姓で呼んでいるだろうか。答えは明らかであろう。外国人との対話になると大部分の人が名で呼びあっている。

このようなことから推察できることは、いい、悪いは別として、日本人は相手の文化を容易に受け入れてしまう習性を持っているということになる。

4.2 ニックネームの概念

ニックネームについても面白い観察がある。ニックネームと言ってもアメリカのそれとは異なり、日本には二つの概念があると考えられる。一つは前述のように必然的に生まれるノンコ、チャコ、ヨッチャン、タッチャン。もう一つ考えられることは体の特徴、体型などから生まれる軽べつ的なあだながそうである。日本人の場合、たとえ子供のころ、ニックネームを持っていたとしても、大人社会に入るにつれ、そのニックネームは使われなくなるのが普通である。

ところが、アメリカ社会の場合はどうであろうか。勿論、ニックネームの概念が日本とアメリカでは異なるのだが、アメリカでは、子供のときであれ、一度持ったニックネームは変わることなく使われるのが普通のものである。

日本人の場合、子供の頃からのニックネームを持っている人はほとんどいないのが普通である。子供的なニックネームは年をとるにつれ消滅していくのが普通の傾向である。これは、子供時代と大人社会では、はっきりした区別を持っていることを示していると言える。

4.3 敬称を必要とする日本社会

日本社会では、勿論、タイトルには十分の注意が必要だが、相手と呼ぶことで大切なことは、名前にしろ姓にしろそれにはそれぞれに、敬称を表すさんをつけることだ。日本人がよく、外国人の first name に Mr, Miss をつけることがある。これは日本社会の習慣を自然にそのまま出したもので、必要なことと思って使われた結果である。言い替えれば、外国人が日本人を呼ぶときに、この面で注意が必要ということになる。日本人が外国人によく、名だけでヒロコ、タダシなどのようにさんなしで呼ばれているのは一見妙な感じでもある。日本語には呼び捨てという言葉がある。アメリカ流にさんなしで呼ばれるのは危険であることを外国人にはきちっと教

えて上げることが必要がある。

もう一つこの件で外国人が注意を必要とすることに、相手の家族のことを尋ねるときに起こす愉快でないミスがある。英語で言う、

How's your daughter?

が

ムスメ ワ ゲンキ デスカ

になってしまう。責めることの出来ないミスであるが、注意を要する問題でもある。さんを付ける習慣は、ムスコ、コドモにまで至る。ひどい時は東京さんとか札幌さんなどと地名や会社名にまでさんをつけて言うこともある。その一方、外国人の旦那さんは自分の wife のことを、オクサン モゲンキデスと言われるのだから当惑することになってしまう。

日本社会では、敬称を表すさん、さまなどの使用が重要であることを外国人には適切に伝えなければならないのである。これは外国人に対する日本語教育で理論的指導が必要である。

4.4 first name 使用の弊害

アメリカ社会での first name 使用の便利さは理解できるが、positive な面だけであるのかを考察してみたい。

first name だけを使用していると、姓である last name を忘れる傾向が強いということを聴いている。友人の一人が名簿で、ある人の住所を調べようと思ったが、覚えていたのはその人の first name だけで、どうしても last name を思い出すことが出来ず、失敗に終わったということだった。これは first name 使用社会の一つの弊害と言えるのかもしれない。

5. 終わりに

以上のように、論を進めていくと、日本語社会は意外と複雑な社会構造になっている。そして一步家庭から外に出ると、日本人は他との対応については非常に緊張した言語生活がなされていることがわかる。このような日本語社会のメカニズムを解明していくことは非常に興味のあることである。

二つの文化圏の中の一つに焦点を合わせて、異なる問題点を考察してみたが、コミュニケーションをスムーズに誤解や違和感なしに行なうためには、まだまだ研究していかなければならない分野が山積しているようである。melting Society の中で誤解のない交流を進めていく中での、このような研究はどんどん推進されていかなければならないと思っている。

REFERENCES

朝日新聞 1994/7/9 どう呼ぼうかな息子の妻。

赤坂和雄 日本人の言語コミュニケーション 日本コミュニケーション学会 1993 桐原書店。

赤坂和雄, 手嶋兼輔 「これからのことば, これからの日本語」 リベラルアーツ 札幌大学教養部教育研究第9号 1994年。

赤坂和雄, 瀧沼誠二 「国際交流と日本人」 リベラルアーツ 札幌大学教養部教育研究第10号 1994年。